巻頭言

子どもたちの社会性と保育者の専門性

汐見稔幸

子どもの社会性はいつごろから育ってくるのだろうか。その発達は乳児期にはあまり期待されない――通常はそう思われているのではないか。しかし、本当にそうだろうか。

一つの例を考えてみよう。ある保育園の〇歳児クラスのこと。そのクラスに日常的についている看護師さんの話だ。

ベテランのA先生は、肝っ玉母さんタイプだ。赤ちゃんを抱いている時に呼び出されて、そっちに向かおうとする時に、誰かほかの赤ちゃんに足元で抱っこをせがまれても、絶対にその子のことを無視しない。もう一方の手でちょっとだけ抱いて、「ごめんね、先生ちょっと用事があるからね。後でね」などと言ってから行く、そんな先生だ。戻ってきたら、必ず約束どおり抱っこをする。

若いB先生はちょっと違う。同じような場面で足元で誰かに抱っこをせがまれても、いま、先生は手がふさがっているし、呼び出されているのだから、無理よ、という態度

で、無視しようとする。それでも抱っこをせがまれると、困った子ね、というようにあまり心を込めず、形だけ抱きあげる。そして、すぐおろして行ってしまう。悪気はないのだが、ていねいな対応という点で、A先生とは違いが見えてしまう。

その看護師さんは、この二人の違いをいつも興味深そうに観察している。そして、子どもはそうした保育士の姿勢、振る舞いをよく見ていて、保育士によって態度を変えるということを発見したという。子どもたちはA先生には普段から喜んで近づいていくし、抱かれていなくても、A先生を拠点にして、そこであれこれ探索活動をする。しかし、B先生のところには普段からあまり子どもたちは自ら近づかないし、B先生のいる時には活動もどこか遠慮がちに見える。そういうことが、よくわかるというのだ。まだ〇歳児、一歳児だ。

私なりに考えると、こういうことになる。子どもが何かイタズラをしようとした時、「あら、何するのかしら？　おもしろいこと始めるのかな？」とその子の好奇心を肯定して興味深そうに見つめる保育者と、「あら、また何かするの？　危ないわねえ。それに汚れたら困るから、やめてくれないかな」というまなざしでその子を見る保育者との違いを、子どもは動物的な勘で見抜くというのだ。何を見抜くかというと、保育者がその子に期待するものの違いだ。子どもたちはもうこの年齢で、保育者のまなざしやしぐさ、言葉かけなどの外に表れた、いわばインデックスの違いを通じて、その背後にある保育者の子どもへの期待という（形にはならない）心理の違いを見抜くというのだ。

これは、子どもたちのある種の社会力、社会性の表れではないだろうか。相手の行為を手掛かり（インデックス）に相手の期待を読み取り、それにふさわしく行動する。こうした行為力は、相当早くから発達するのではないか。

同じクラスが、担任が変わることによって見違えるように変わることがある。この時、何をきっかけに、どういうメカニズムでクラスの雰囲気が変わるのか、そもそもクラスの雰囲気と言われているものの実体は何か。こうしたことは、これまでどのように研究されてきただろうか。クラスの雰囲気とは、先生の子どもへの期待の（意識的、そして無意識的な）表出と、その意味を読み取った子どもの自らの行動への自主規制の意識の集合である。

保育の専門性ということが最近の保育研究のメインテーマの一つになりつつあるが、いま述べたことは、専門性研究の重要なテーマとして位置付いている感じは正直言ってあまりない。しかし、実際の保育を観察すると、保育者が中心になってつくり出す子どもへの期待の心理システムとしての雰囲気が、子どもたちの行動を規制する率は極めて高い。とすると、保育者の専門性の一つは、自らがどういう期待のシステムづくりを行っているかを自覚しているかどうか、そして、子どもたちの望ましい発達を促すような雰囲気をどうしたらつくることができるかを知っている、ということでなければならない、といえるだろう。

以前、話し合い保育を実践している、ある大規模な幼稚園で興味深い出来事があっ

た。雨の日で、全員、クラスの部屋かホールで遊んでいた。ホールには年長児が多く、クラスごとに固まって遊んでいた。隅っこで大型積み木を積み上げていたグループがいたが、それが崩れ、窓ガラスが大きな音を出して割れた。その様子を見ていたほかのクラスの子どもたちの行動が、クラスごとに見事に違ったという。あるクラスの子は近づかないで、僕たち関係ないよなとひそかに言い合い、あるクラスは「やーちゃった、やっちゃった、○ちゃんがやっちゃった」とはやし立てた。別のクラスの子は近づいて「○○ちゃんがいけないんだ」と犯人探しをした。もう一つのクラスだけが「先生呼んできて。△ちゃん、こっちから下りないと危ないよ」と適切な対応をした。

後で調べると、日ごろの話し合いで「○○ちゃん、自分がいけないことわかった？じゃみんなに謝って」などという態度で先生が接していたクラスは、ホールで犯人探しをしたし、先生が気に入ることを発言すると先生の目が輝き、気に入らないことを発言するとそれを顔つきで示してしまう先生のクラスは、僕たち関係ないよな、と様子見を決め込んだことなどがわかった。適切に対応したクラスのみ、先生はどんな発言をしようと同じように大切に扱い、最終的には自分たちで考えさせようとするような態度であった。

ビデオで撮るのもよい。自分の態度に表れている期待を何とか可視化して、自分の対応がつくり出している雰囲気を自覚すること。これが、保育の専門性向上に何かしらつながるのではないかと思う。

（白梅学園大学教授）